

水 井 戸 の 話

⑬

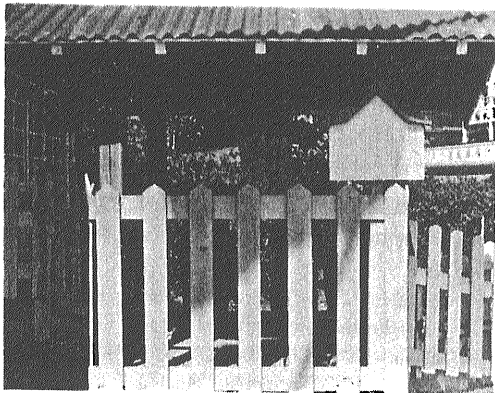
井戸の保存

村下 敏夫

いよいよ台風シーズンである。9月26日前後になるとふしぎと勢力の大きい台風がやってくる。洞爺丸台風 伊勢湾台風などがそれである。昨年9月25日の未明に26号台風が関東の北部を横切りその東側にあたる所ではたいへんな被害があった。

その被害のなかで身にしみて感じたのは水道である。私が住んでいる昭島市の水道水源は地下水である。予備の動力源と給水車をもっていないので長時間の停電には大いに迷惑する。近所にある都営住宅の水槽に溜っていた水は朝の10時頃にはなくなった。幸いにも私の家では庭の片付けなどで朝早く起きていたから停電が長時間にわたることを予想して水を汲み置いていた。ところが台風が朝早く去ったのと日曜日であったことが重なって日が昇るまで朝寝坊していた家ではまず飲み水に困った。パンとミルクが飛ぶように売れてお店は仕入れにでんてこ舞いだっただよう。水洗便所という現代様式で一番困るのはその水である。バケツに水を汲んで通うだけではなく しまいにはその水すらなくなってしまふ。

水が出るようになったのは夜の9時すぎであった。待ちかねた人がいっせいに蛇口を開くから一向に水が溜らない。空気が入っていて白く濁っているから気味が悪い。水道課の人たちもその対策には苦労したようだったが翌日無理して借りてきた給水車が団地にやってきたときには水が何とか間に合っていたから誰も見向きもしなかったという。



小作駅にある懐古の井戸

さて その時に活躍したのが 手押しポンプ付きの水井戸である。 昼を過ぎると水が少しでも出るような所は 人の行列である。 まず学校の校庭にある蛇口には 戦後の物資配給当を思わせるように よちよち歩きの子供まで狩り出されて順番を待っていた。 しかしこれも長続きはしなかった。 その頃には 水井戸がある家では 滅多に使わなかったポンプのバルブを直して やつと水を汲み上げるまでになっていた。 日頃簡単な挨拶ぐらいですませていた近所の奥さんまでが この仕事を手伝った。 そして水が汲める——といううわさはアツという間に町内に広がった……。

青梅線に「小作」という小さな駅がある。立川駅から数えて ちょうど10番目の駅である。 駅前は数年前までは閑散としていたが 青梅線の複線工事が進み 都市開発が進むにつれて だんだんとにぎわいできた。 駅舎は古びたむかしながらの建物であるが 水道が完備して今までの水井戸は無用の長物となってしまった。 しかし 廃井となっても「懐古の井戸」(写真1)として保存されている。 ふつう気付かずに通りすぎるかも知れないが そこにはちゃんと保存の理由が書いてある。 懐古の井戸の由緒にいわく——

明治27年11月末 青梅鉄道株式会社小作駅が 駅長外1名で誕生しましたが 当時この駅周辺は水の便が悪く なんとか井戸を一つ設けたいとの念願から代表者協議を重ねた末 当時にしては莫大なる費用を拠出して作ったのが この井戸であります。

付近の人々は この井戸によって永く生活を営んでいたが 世の進むにつれ水道が完備され 自然とこの井戸も使用価値を失いましたが 小作駅発展の礎でもあり 当駅誕生と同時にこの町が一部落としての誕生であり 当時からの生命であったことを想い起し懐古の情しのびがたく ここに懐古の井戸と銘うって保存することになった次第です。 昭和38年3月1日

小作駅から北へ約1km 行ったところに 新町という集落がある。 ここは武蔵野の原にポツンと孤立していたが 青梅街道が拡張舗装されて交通量が増え 沿道に住宅が建ってきたので 近いうちには隣りの青梅市街地とくっついてしまうであろう。

その東はずれに「新町開村350年記念」(昭和35年9月之建)という木碑が建っている。 そして

「武蔵野の開拓ここに始まる」

「慶長16年吉野織部之助を中心として近傍18ヶ村より移住開拓し 元和2年一邑開発が大成した」

と大書してある。

この碑のはす向いに つるべ井戸が残っている(写真2)。 この井戸は つい最近まで使用されていたと記憶

していたが いまは形だけで 住民は別の井戸水を水源にした簡易水道にたよっている。

都市計画のすうせいでは 当然つぶされるであろうこの井戸が形だけでも残された経緯はわからないが 懐古の井戸と同じように開拓のむかしをしのんで保存されることになったのではなからうか。

昨年度川崎市からの依頼で 市内の地下水調査を行った。その目的は 関東大地震や新潟地震のような大災害に見舞われた際 地下水がどの程度まで飲料水として使用可能であるかを調べておき その対策を十分にたてておく ということにあった。この成果は別としても 水井戸が少なくなったのには驚いた。

川崎市街地は 元来地下水の水質が悪いところで むかしは引越しの際には砂や木炭を使用して造った簡易なる過槽を大八車にのせて運んだものだった。これは いわば生活必需品であった。それが今では 多摩川や相模川の水を水源としたりっぱな水道があつて 湯水時でもさして困ることもなく 川一つ隔てた東京都民よりは恵まれた環境で生活ができています。したがって 水質の悪い井戸は 無用とばかり埋められてしまったのであろう。

寿司やで「すずきさん」といえば 味の素のことである。その味の素の工場が川崎市にできたとき 工業用水として使用する地下水がなくて苦労したらしい。多摩川沿いの敷地では十分に地下水が採れないので 探し求めて第二京浜国道のそばにある御幸警察署の近くでやっと満足な水井戸が掘れた。ここは多摩川旧河道でその水みちの幅もわずか 300 m ぐらいしかないところである。川崎市内では この水みちでなければ満足に地下水が採れないので それからはずれた所に立地した工場は わざわざ水みちの上に水井戸を掘って 遠距離を送水している。川崎市内だけではなく 横浜市の鶴見区にある工場も ここに水井戸を掘って送水している。しかしお互いがそんなことをしたのは不経済であるというので 工業用水道による給水方法が立案され それを川崎市が引き継いだ。これが わが国最初の公営工業用水道で 昭和14年の通水である。

従来工場群がもっていた水井戸は 昭和30年頃からの景気上昇に伴って酷使され 鉄分や塩分が増えた上に水位が低下して水量が減少してきたこと 水質のよい工業用水が供給されるようになったこと 効率のよい冷却塔ができ 水の再利用による水合理化が進んできたことなどの理由で 海岸近くでは数多く廃止された。しかし味の素は 創業当時の苦労が受けつがれているせいか

水井戸をたいせつに使っている。

川崎市でも大地震のような災害時には 水道水の使用は困難であろう。多摩川の水でも 丸子橋までは塩水だから飲めない。こういう時には 最小限飲むだけの水があればよい。また少々鉄分が多くてもろ過すればりっぱな飲み水がつかれるし 細菌が混っていても煮沸すれば飲料にならう。災害時に人が集ってくるであろう 学校 公園 広場などには 浅くてよいから水井戸を掘っておくことが 必要である。

水道が普及すると 水井戸は忘れ去られる。ときには危険だからといって 埋められたりする。台風や地震などで水道が使用できなくなれば 思い出してもらえ程度のものになりつつある。

それにしても保存しておきたいのは 工業用水法やいわゆるビル用水法で廃止しなくななくなった水井戸である。工業用水法では 断水したときに危険な工場に限って 特例として水井戸を残すことが認められている。しかし ただふたをしておいただけでは いざというときには 物の用には立たないかもしれない。水井戸は道具と同じであつて いつも使っておれば水みちが自然についているものである。鉄分が多い地下水の場合には ながく井戸を使っていないと ストレーナーの周りに鉄を主体としたスケールがついて目づまりが生じ 汲み上げても水の出が悪くなる。だから井戸を休ませておくときには 時々揚水してスケールをとって手入れをしておくことが必要である。ついでに 水質試験をして その後の変化を知って急場の対策を樹ておくことも大切である。

水井戸があれば 少々水位が低くても水を汲み出すことはできる。ポンプははずしておいてもよいから 井戸だけは埋めないでおいてほしい。天災が多い国だけにいざというときに備えて 水井戸は何らかの方法で保存しておきたいものである。
(筆者は応用地質部)



新町のつるべ井戸